

進学を志したという。しかし、多くの場合は、個人的な問題として自身の意欲を冷ましていくのが通例である。Bは、次のように教職の現状では選択するのは困難だと語っている。

「楽しそうなんです。今までの仕事の中で一番生き生きはしてるなと思うんですけど。でもやっぱり大変そうだし。これは多分、自分の子育てが終わってからじゃないと絶対できないなっていう風に思いました。」

Qは、自分の母親が幼稚園教諭をしていたときの状況を思い起こし、民間企業の方が自分の時間を大切にできると考えた。

「やっぱ、理想と現実を照らし合わせたところが大きくて、最終的には、やっぱり長く働きたいっていうのが、私の中であって、その軸を考えた時に、やっぱり先生って自分を犠牲にすることも多いな、多い職だなっていう風に感じて、就職活動の時に初めてこう、仕事を優先するべきなのか、自分のプライベートも大事にするべきなのかっていうのを真剣に考えて、それまでは、自分が必要とされるところでお仕事をしたいっていう思いが強くて、そういう面でみると、教職っていう仕事は自分に合ってるんじゃないかなっていう風に感じてたんですけど、自分のプライベートを意識するじゃないですけど、長く働くことを考えると、自分の生活も大事にしなきゃいけないなっていう風に思って、母が凄い忙しそうに働いてるところも間近で見たり、とかしていて、やっぱりこう大変な職業だっていうのは実感してたので、最終的にはその面で決断しました。」

この点は職業文化・労働環境の男性性（masculinity）のありようともかかわってくる問題でもある。実際、対象者のうち二人は、指導教員も気づかなかった体力への自信のなさや抱えている病気を理由にして最終的に教職の道を諦めることになった。彼女たちの選択を「無理をしない賢明な選択をした」と単純に礼賛するだけにとどまってよいのかとふと疑問が湧いてくる。つまり、働き方改革が急務であるほどに教職の労働環境の劣化が深刻化していること自体を所与として放置したままでは、多くの若者の有意義な選択を阻害させてしまう結果につながるのではないか。何よりも、しんどさを経験し、弱さを受け容れることを経験した若者が普通に勤務できる学校であることが、同僚にとっても子どもたちにとっても「傷つきやすさ」（ヴァルネラビリティ）を包み込むゆたかな学びの場をもたらすことにつながるはずである。

実際に、就活を進める中で、教職への道を閉ざした上で、よりマシな環境を提供してくれる企業を選択することになる。Eは、その一例である。

「もう一点はこれは教職と違う部分なんですけど、やっぱり働くにあたって、自分自